

レイカ
北部小学校の五年生。
学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友達は少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

優助
北部小学校の五年生。
レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っている。レイカに不穏なメツセージを送ったあと、姿を消す。

スズナ
北部小学校の四年生。
真夜中の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。



ひろし

レイカのクラスメイト。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。



タケル

ピジョン・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、パレると面倒なので秘密にしている。



魔尾町現悩(ゲンノウ)

オカルトを中心に研究をしている民俗学者。

ハルナ先生

レイカのクラスの担任の先生。深夜の北部小学校をはじめ、過去三度にわたって青鬼に遭遇しているが、記憶が曖昧になっているようだ。

ユズキ

ハルナ先生が小学生だった頃、碧奥小学校に通う同級生だったが、ある日、境に姿を消した。この夏、ハルナ先生は碧奥医院で出会った青鬼を「ユズキ」と呼び……。





青
あおおに
鬼
調査

| | |
|--------------------|-----|
| 碧奥港エリアMAP | 006 |
| 廃村区画、旧公民館の見取り図 | 008 |
| 1 優助を探して | 010 |
| 2 オカルト民俗学者 | 020 |
| 3 消えかけのひとだま | 039 |
| 4 封鎖された門 | 045 |
| 5 廃村 | 055 |
| 6 傷ついたゲンノウさん | 067 |
| 7 手負いの怪物 | 076 |
| 8 真相 | 082 |
| 9 撤退 | 092 |
| 10 作戦会議 | 102 |
| 11 いつか見た攻撃 | 108 |
| 12 東区画へ | 121 |
| 13 民家からの脱出 | 126 |
| 14 たまちゃんの手 | 138 |
| 15 旧碧奥港 | 149 |
| 16 伸ばしてはいけない手 | 160 |
| ??? | 178 |
| 碧奥港エリアMAP その2 | 180 |
| 廃村区画、旧公民館の見取り図 その2 | 182 |

8月29日 PM10:20



優助

そろそろ寝るわ

既読

わたしもそうする



レイカ



優助

おやすみ

既読

おやすみなさい



レイカ

8月30日 AM 5:08



優助

碧奥港には近づくな



優助

って言っても、レイカならどうせ来るよな
だからさ、頼みがあるんだ



優助

もし、碧奥港で『アイツ』に出会ったら、

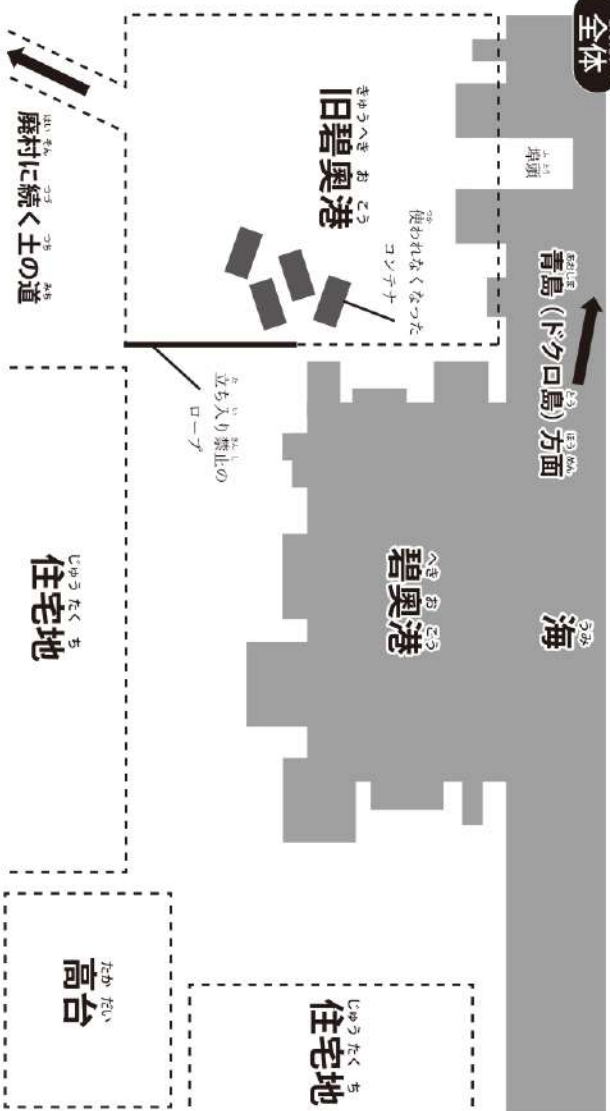


優助

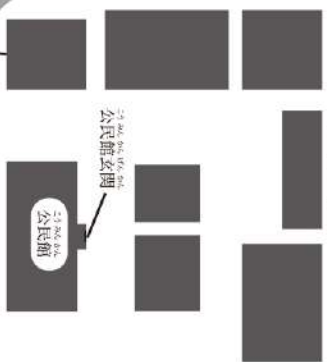
絶対に倒してくれ

碧奥港エリアMAP

全体



西區画



東區画に比べて
大きな建物が
多い

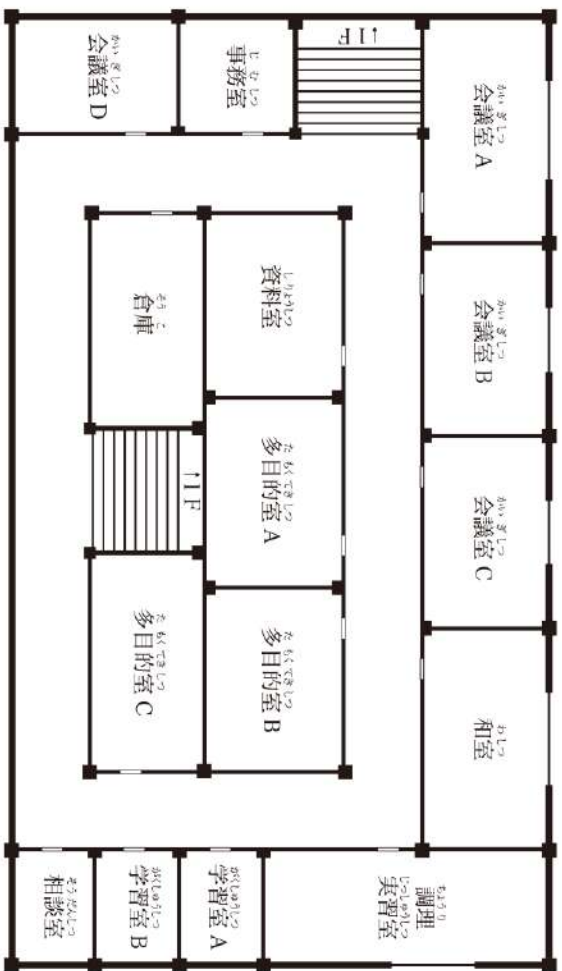
東區画



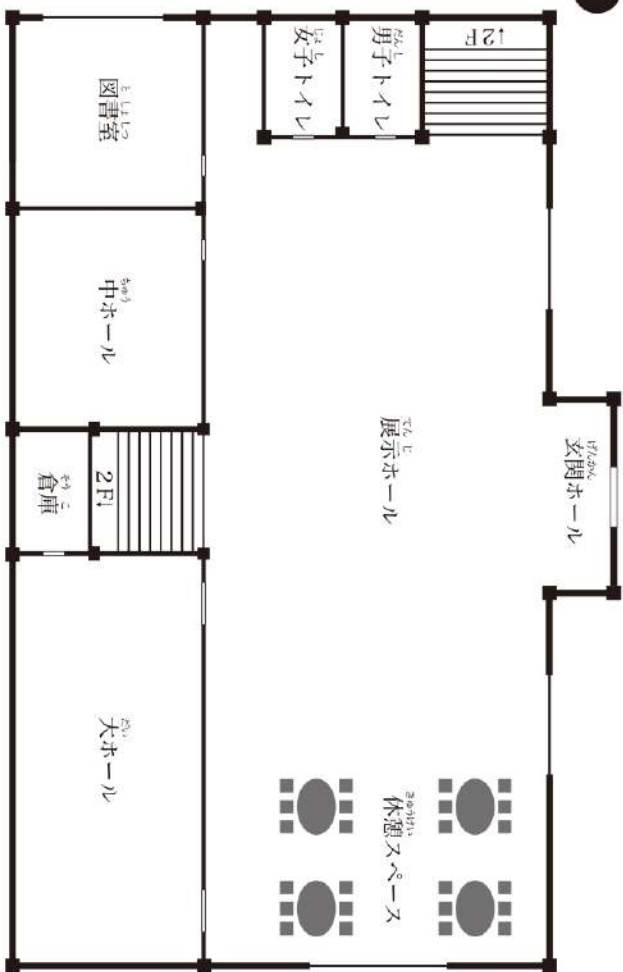
住居が
多いが
どれも空
き家にな
っている

はいそんくかく　せゆうこうみんかん　みと
廃村区画、旧公民館の見取り図

2F



1F



1 優助を探して

潮風が吹く。

残暑と混ざり合つて少しベトベトしている。

しかし、そんなことなんてまったく気にならないほどに、目の前に広がる海はキラキラと輝いていた。

「夏を感じるわね……」

八月三十日。十三時。

晴天の碧奥海岸。

わたしはさざ波の音に耳を澄ませる。

「もうすぐ夏休みが終わりだと思つと、ちよつと寂しいですよね」

隣では、麦わら帽子をかぶつたスズナちゃんと同じように耳を澄まし、海の風や音を楽しむように目を閉じていた。

わたしたちが住んでいる地区から電車に揺られて数十分。



駅えきに到着とうちくしてから、さらに十分じゅうぶんほど歩く
と、碧奥海岸へきおくかいがん——その中なかでも、漁師りょうしの人ひとたち
がたくさんいる碧奥港へきおくこうに辿たどり着つく。

「ごめんなさいね、スズナちゃん。いきなり
呼び出よびだしてしまって」

「いえっ。レイカちゃんとお出でかけできるな
ら、いつだってすぐに来きますよ！」

わたしたちは少し高台たかだいになっているところ
から碧奥港へきおくこうを見下みおろしていた。

スズナちゃんに声こゑをかけたのは、今日きょうの昼ひる
前まへだった。

断ことわられても仕方しかたがない、と思おもって連絡れんらくした
のだが、スズナちゃんからすぐに「行きま
す！」と返事へんじがきて助たすかった。

なぜ、夏休なつやすみの終おわりにこんな場所ばしょに来きた

のか。

それは忘れていた自由研究を終わらせるため——などではもちろんなく、今日の明け方に優助から気がかりなメッセージが届いたからだだった。

『碧奥港で「アイツ」に出会ったら、絶対に倒してくれ』

そんな言葉を最後に、優助とは連絡が取れなくなってしまった。その後、何度もメッセージを送ったのだが、いまだにまったく返事がない。

だから、わたしは今朝の九時ごろ、優助の家まで直接行ってみたのだ。

優助のお母さんによると、優助はクラスの友達の『ひろし君』の家に泊まりで遊びにいくと言つて、今日の早朝に突然出かけたらしい。

本当にいきなりのことだったようで、優助のお母さんは不思議がついていた。

わたしは「ありがとうございます！」と笑顔を作つて、すぐに優助の家を離れたが、内心はかなり嫌な予感がしていた。

そもそも、優助のクラスに『ひろし君』はいない。嘘をつく際に、たまたま思い出した名前が『ひろし君』だったのだろう。

だが念のため、わたしは優助が思い浮かべたであろう『ひろし君』の連絡先をスマホの中から

探し、電話をかけてみることにした。

北部小学校五年生の中で、かなりの秀才かつ変人として知られている、あのひろし君だ。

青鬼の情報を共有する目的で、ひろし君とは連絡先を交換していた。

だが、電話に出てくれたひろし君の反応は予想通り。

「優助君と泊まりで遊ぶ約束ですか？ いいえ。そんな約束はした覚えがありませんし、実際に優助君が遊びにきたという事実もありませんよ。僕は今日もタケル君のところに行こうと思つています」

知らない間に、優助とひろし君が仲良くなつていて、本当に泊まりがけで遊びに出かけただけならどれほどよかつたか。

……優助はわたしへのメッセージを最後に、完全に姿を消してしまった。

「もう……心配させないでよね」

「大丈夫ですよ。きつと優助君は青鬼の新しい情報を伝えたかつただけだと思ひますつ。もしかしたら、先に情報を集めてくれているのかも！」

わたしの表情ひょうじょうがくもつっていたことに気づいたのか、スズナちゃんは明るく笑顔えがおを浮かべて、励はげますようにそう言いってくれた。

「スズナちゃんが仲間なかまになつてくれて本当ほんとうによかったわ。隣となりにいてくれるだけで、すごく心こころがいやされる」

「えへへ、お役やくに立たっているなら何なによりです。それでどうしますか？　まずは碧奥港へきおくこうで優助君ゆうすけくんの目撃情報もくげきじょうほうを集あつめましょうか？」

「そうね……聞きこみも大事だいじだけど、まずはこの周辺しゅうへんの地形ちけいの確認かくにんから始めはじめましょう。優助君ゆうすけのメッセージが本当ほんとうに青鬼あおにの新しい情報じょうほうだとしたら、碧奥港内へきおくこうないで青鬼あおにと遭遇そうごうすることを考かんがえて動うごかないといけないから」

といつても、頭上ずじょうには青空あおぞらが広ひろがり、太陽たいようが熱あつい日差ひざしを注そそいでいる。

こんな場所ばしょで青鬼あおにに襲おそわれる気があまりしないのは事実じじつだ。

だが、少しでも危険きけんがあるのなら慎重しんちょうに。

それが青鬼対策あおにたいさくの基本きほんだ。

スズナちゃんも同意どういするようにうなずいてくれたので、わたしたちは二人ふたりで辺りあたりをよく見回みまわして、一つずつ、場所ばしょの情報じょうほうを確認かくにんしていく。

「まずは碧奥港ね」

碧奥港は小規模な漁港だ。

漁港を囲むように漁師さんたちの家があり、港町を形成している。

漁師さんたちは毎朝、魚を捕まえるために小型の船をこの港から出しているのだ。

もうお昼ごろということもあり、すでに漁は終わっていて、ほとんどの船が戻ってきている。

「次は沖の方に向つすらと見える島です」

スズナちゃんに背負っていたバッグから双眼鏡を取り出して、わたしに手渡してくれた。彼女が指さす方向を覗くと、そこには見覚えのある島があった。

「あれは……青島？」

「レイカちゃん、知ってるんですか？」

スズナちゃんは驚いたように言った。

たしかにこの辺りまで子どもだけで来ることはほとんどないし、地元の名前など知らない方が自然だろう。

だが、今年の北部小五年生はおそらく全員がその島のことを知っていた。

「実はね。北部小の五年生は七月の後半に課外学習で一泊二日の船旅に行ったの。その時に青島

にも立ち寄ったのよ」

「そうだったんですか。島の名前を当てられて、ちよつとびつくりしちやいました」

スズナちゃんは納得した表情でふむふむ、とうなずいた。

また、青島のことをよく覚えていたのは、わたしが個人的にオカルト現象が起きないかな、と期待していたからでもある。

「青島は上から見た形が人間の頭蓋骨に見えることから、通称『ドクロ島』とも呼ばれていてね。そんな名前だから、何かオカルト的な事件が起きて、とんでもない騒ぎにならないかなってワクワクしてただけど、結局、何も起こらなかつたわ……」

「とんでもない騒ぎが起きなくて良かったです……」

わたしはスズナちゃんに双眼鏡を返す。

「でも、青島は今回あまり関係なさそうね」

「はい。島まではかなりの距離があるので、優助君があそこにいるとは考えづらいと思います。

あくまで立地の一部としての確認ですね」

そうして、スズナちゃんはまた別の場所を指さした。

「次は碧奥港の端の……あの怪しいエリアを見てください」

スズナちゃんが表示した方角に目をやると、碧奥港の外れに奇妙な場所があった。

立ち入り禁止と書かれた看板が一定の間隔で並べられ、人の侵入を拒むように黄色と黒の縞々のロープが張られている。

明らかに封鎖されているといった雰囲気だった。

「電車移動中にスマホを使って調べてみたんですけど、あの辺りは旧碧奥港と呼ばれていて、昔はあそこまで含めて、すべてが碧奥港だったみたいです。現在は封鎖されていて、人の行き来もほとんどないらしいですよ」

「そんなところでリサーチ済みなんてわたしより優秀じゃない、スズナちゃん……!」
恐ろしい後輩が現れたものだ。このままでは、調査クラブのリーダーとしての威厳が崩壊してしまうかもしれない。

「レイカちゃんは電車の中で寝ていましたからね。地理関係は私が調べておいたんです」

「ご、ごめんね。今日は朝から動き回ったから疲れがたまつて……。青鬼に会う可能性があるから、今回は戦う用意もしないといけなかったし」

優助のメッセージの中には、青鬼だと思われる記述があつた。

だとすれば、手ぶらで碧奥港に行くわけにはいかない。

ということ、奇襲を受けた北部小の時とは違つて、今回は限られた時間の中でちゃんと青鬼対策をしてきた。

ただどわたしにとつて、今日ここを訪れた目的は青鬼の調査ではなく、あくまで優助を探し出すことだ。

やるべきことの優先順位だけは間違えないようにしないとイケない。

「それで、なんであの場所は封鎖されてしまったのかしら？」

その問いに初めて、スズナちゃんが困つたような表情を浮かべた。

「うーん。それがいくら調べてもよくわからなかつたんですよ。旧碧奥港から陸地側に続く道の

先には村があるみたいなんです……。二十年くらい前にその村で何かが起こつて、旧碧奥港と

一緒に封鎖されたらしいです。でも、その何かまではネットでは出てきませんでした」

「封鎖された港の一部に、謎の村……。いかにもオカルトっぽい場所だけど、わたしが前に青鬼

やオカルト関連の噂を調べた中に該当しそうなものはなかつたわね」

そういう廃墟のような場所であれば、青鬼でなくとも、オカルト的な噂や都市伝説の類があつておかしくないと思うのだけれど。それか、みんな本当にその話には触れたくないのかもしれないな

い。

「ただこの辺りに青鬼がいるんだとしたら、封鎖されている旧碧奥港か、そこから続く廃村か、そのどちらかが怪しいわね」

「はい。私もそう思いますっ」

「送られてきたメッセージから考えて、優助はこの碧奥港エリアのどこかに青鬼がいると確信していたみたいだし、まずは怪しそうな旧碧奥港の探索から始めましょうか」

わたしは地面に置いてあった自分のバッグをかつぎ直す。

いつもよりも重いので、少し気合を入れて背負わないといけない。

「ずっと思ってたんですけど、そのバッグの中、何が入ってるんですか？」

不思議そうに訊ねてくるスズナちゃん。

「これは青鬼対策の道具よ。さつきもちよつと言ったけど、朝はこれを調達するので忙しかったのよ。今回は危険な場所にこっちから行くことになるし、切り札はちゃんと持っておかないとね！」

わたしはそう言っ、スズナちゃんにウインクをしてみせた。

青
あおおに
白
鬼
ク
調査
ラ
ズ
③

ふう さ ふう さ ふう さ
封鎖された港を探索せよ！

ノプロプス くら だけんじ
noprops・黒田研二／原作

なみつみ
波摘／著

すずらぎ
鈴羅木かりん／イラスト